



平成 29 年 12 月 15 日
発行責任者 小口 弘毅

北里大学小児科同窓会会報 Vol.22



2017.6.17(土)北里大学小児科同窓会総会懇親会より

巻頭言

「3つの大切な同窓会」 おぐちこどもクリニック 小口弘毅(1回生)

会長として巻頭言を書くのは最後となります。個人的なことまでたくさん書くので、長くなりますが、どうかお付き合いください。小児科の創成期からのスタッフである三浦壽男先生は、私たちが病棟医の頃、若々しくなんでも相談できる優しい私達の兄貴分のような存在でした。北里退職後は相模原療育園の園長を引き受け、晩年まで重い障害を持った子供達へのまなざしは優しく、子供達に寄り添う姿は変わりませんでした。私は時々ご機嫌伺いに訪問しましたが、先生と会うだけで北里時代が懐かしく思い出され、貴重な時間でした。先生から強く諭されて同窓会長をお引き受けしたわけですが、同窓会長として何をすべきかなどお聞きしたいことが沢山あったのに、その機会が永遠に失われたこと本当に残念です。微力ながら先生のご遺志を生かすように会員諸氏の力を借りて、同窓会の発展に尽力したいと思えます。長きにわたって指導して下さった事に心から感謝いたします。ご冥福をお祈りいたします。合掌。

三浦先生から同窓会会長を引き継ぎ、同窓会の低調ぶりを目にするるとさすがに何とかしなければと危機感を覚えました。しかも昨年の同窓会参加者はわずか28人、そのうち大学所属の小児科医の参加は教授を含めてわずか6人でした（幾つかの学会に重なっていたこともあるでしょうが）。このような状況を打開するために、理事会では会報を刷新し、同窓会総会、そして懇親会のやり方も変えて多くの同窓生が参加するように努力しています。昨年は私の発案で伊藤（旧姓丸野）、内藤、守屋の3先生に開業医としての取り組み、あるいは想いを、自然体で語ってもらいましたが、この企画は楽しく有意義だったようです。同窓生の皆様どうか6月9日の同窓会に参加してください。小児科の各専門分野の中心となる先生、そして参加する先生は積極的に同学年のみならず前後数年間の先生に声をかけて誘い合わせてください。私は新生児部門の責任者だったので、手本を示すと――“どうか新生児科医の皆さん、NICUで苦勞を分かち合った仲間なので、ふるって参加して下さい。私から10回生までの先生、久しぶりに同窓会に参加して旧交を温めようではありませんか（もう私にはあまり時間はありません）”と、こんな具合です。

私にはもう一つ小さいけれど、大切な同窓会があります。40年くらい前に相模原の秘境(?)と言われた下原の畑に囲まれた牧歌的な場所にちっぽけな白樺荘（前庭に白樺が植えられていました。中庭には小さな風呂棟もありました）という新築アパートがありました。住人8人のうち5人が一回生でした。私たち5人はその白樺荘で3年間、寮生活のような楽しい学生生活を送りました。まさに昔のスタイルで、共に学び、議論し、飲み、懐かしい青春の思い出となっています。その仲間に、登山に夢中になっていた私の犠牲者?がいました。対馬か



黒部の上の廊下にて同級生の山岡と主藤（最強コンビ?）

ら来た男で登山経験は全くありませんでしたが、体力抜群（空手部主将）で、私の登山に付き合ってくれ、二人でたくさんの山々に登りました。エキスパートのみに許された深い溪谷（黒部上廊下、赤石沢など日本有数の溪谷を遡行！）の沢登り、残雪の南アルプス大縦走、そして厳冬期の北アルプス縦走を経験しました。

卒業後に5人の白樺荘住人は、創成期の北里で学んだことを胸に全国各地に散って良い臨床医となりました。その5人で50歳過ぎてから同窓会を開いています。白樺会と名付け、持ち回り幹事で夫婦同伴を原則に全国各地で開いています（箱根、山中湖、湯布院、仙台、松江-）。

最後の二組になるまで続けようと、全ての予定に優先して集まっています。共同生活を懐かしむと同時に、お互いの老いを温かく見つめ、心配し合うというなんとも涙ぐましい会です。寂しいことですが、この同窓会はいずれなくなってゆくでしょう。しかし、毎年新しく会員が入ってくる小児科同窓会は発展してゆく会です。同窓生のみなさん、ルーツを大切にしようではありませんか。

最後にもう1つの同窓会を紹介します。

それは一期一会と銘打ってハロウィーンの日で開催したNICUスタッフの同窓会です。企画した時には集まるだろうかと心配しましたが、全国から100人を超す看護師（現役NICUナースから60代の熟女まで）と新生児科医（NICU創設者の三原、仁志田両先達も元気に参加）が集まりました。受付で早くも看護師たちは抱き合い、黄色い声を上げ、大変な騒ぎとなりました。看護師の多くは“私の看護の原点はNICU”と言い切っていました。この同窓会の記念写真集のタイトルは“愛と涙と---青春のNICU”でした！？



黒部峡谷源流でのキャンプ



箱根での白樺会同窓会



北里大学小児科 近況

小児科教授 石井正浩

北里大学小児科の近況としましては、ここ3年間の入局者の減少と准教授、講師などの指導的立場の医局員が開業に伴う退職などにより医局員の減少が大きな問題であります。私が、主任教授に赴任して最大の危機的状況を引き起こしています。これもひとえに主任教授である私の責任と重く受け止めております。本年より病棟医不足のためスタッフが主治医として受け持ち医をして何とか教室を支えています。彼らの努力には頭が下がります。しかし、いつまでも危機的状況に甘んじているわけにはいきません。医学部長、病院長とも話し合い、現在大学病院で行っている高度な先進医療にマッチする教育体制を作ることが肝要であるという結論に達しました。本年度から教育体制を見直し指導的立場の人材を広く外部から招請することにしました。幸い、福島県いわき市の寄付講座、いわき小児循環器、地域医療講座を北里大学に設立することが出来ました。現在、特任教授1名、講師1名、助教1名が在籍しております。11月より、先崎秀明先生を、北里大学医学部附属新世紀医療開発センター 先端医療領域開発部門 小児循環器集中治療学教授として招聘しました。このほかにも指導的人材を招請し、来年度に向け新しい北里大学小児科の教育体制を構築する予定です。現在、教室のモットーであるチームの力結集を実践し全医局員が診療、教育、研究に全力を尽くしています。今後とも、同窓会の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

新世紀医療開発センター 教授就任挨拶

第4コーナーにて



新世紀医療開発センター先端医療領域開発部門

小児循環器集中治療学教授 先崎秀明

医者になって大学人として65歳を定年とすれば、現役はほぼ40年であり、私は今ちょうど1周40年のトラックの第4コーナーに差し掛かったところでもあります。そして、最後のバックストレートをどう走るかという時期にあるのかと思います。まさにこの時期に、北里大学に赴任させていただくというのは決して偶然ではないなにか“ご縁”といったものを感じずにはおれません。

私は、1988年に東京大学医学部を卒業し、これまで小児科および小児心臓病の医療に従事してきましたが、幸いスタートラインに立った時の思いを継続してこれまで医療にあたることができたと思います。これはひとえに、よき後輩、同僚、仲間、先輩に恵まれてきたおかげで たくさんのご支援、ご協力、ご理解をいただいたたまものであると改めて感謝いたしたい気持ちです。さらに 患者さんやその

ご家族からの思いは わたくしの医療に対する思いを育てはぐくみ成長させてくれました。私がこれまでも今後も医療人として基本にある考えは、患者さんやそのご家族にできる限り寄り添うことができる優しい医療の実践であります。この考えは、大学における診療、研究、教育のどれにおいてもその基本となるもので、やさしい医療の実践の場が診療であり、やさしい医療の実践ための研究であり、やさしい医療を支える教育であります。そのためには、同僚として医療に当たる教室員一人ひとりと、医療を学ぼうとする学生一人ひとりと、医療を支えてくれる医療従事者、関係者の一人一人と真摯に向き合い、意見を交換し、そして伝えるということを基本の姿勢としてこれまでもこれからもやっていきたいと思えます。その上で、個々の自由と責任を重んじ、それぞれがそれぞれの立場で、北里大学の一員として、本学が日本有数の、世界有数の医学部、病院として発展することにより、結果として社会に貢献できる体制づくりに努力したいと考えております。さらに、私は診療、研究、教育に加え、もうひとつの柱として社会貢献ということを考えております。日々の研究、診療、教育の中で得られたものを社会に直接還元する活動として、地域の子ども向けの“命の大切さや心臓に関するセミナー”の開催、“患者さんや親御さん向けの教育セミナー”の開催、医療過疎地域への支援等、これまで行ってきた活動もできれば、北里大学からも発信していければと思います。

私が医者になってまだわずか30年ではありますが、この30年間に医学、医療は目覚ましいほど進歩しました。しかしながらその30年にも、あるいはずっと昔からも変わらないものがあると思えます。過日、長い闘病生活を送られてきた6歳のお子さんが余りに短い人生を終えられました。おばあちゃんが一生懸命介護に当たられていました。本来であれば、次春には真新しいランドセルを担いで、お父さんお母さんに祝福され小学校に入学するというのも、かなわないことでした。そのお子さんは、私がおはよう、こんにちは、と挨拶すると、本当は痛かったり、つらかったりするだろうのに、いつも、本当にいつも、にっこりとしてくれました。とてもありがたく思いました。切なくも感じました。ある日、看護婦さんに連れられて、車椅子でお散歩に出かけたときに、もみじの落ち葉を拾って集めてきたようでした。なぜかそのひとつを私にくださいました。そのもみじは、世界的生理学者である菅弘之先生から頂いた賞状の額の中に一緒に大切にしまってあります。心を感じ、やめるお子さんやそのご家族に少しでも元気と安らぎが生まれるような医療に少しでも力になれるようこれからも精進したいと思えます。まだ赴任して間もないですが、教室の先生の人材の面でもハードの面でも大きなポテンシャルを感じずにはられません。バックストレートをここ北里大学で走れることを喜びとし、最後のいい走りができればと思う次第です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



追悼 三浦壽男先生

故 三浦壽男名誉教授を偲んで

山岸 稔

三浦先生と聞けば、真っ先に47～8年前の荒蕪たる相模原の大学・病院建築工事現場や、砂埃にまみれたプレハブの仮校舎が目には浮かぶほど、北里・医学部創設の実務的貢献者の一人ですが、初めての出会い、ご交誼は慶應・小児科時代に遡ります。

昭和38年4月慶應・大学院第8回生（小生1回生）として小児科へ入局、2年後に小生も所属したジフテリア研究班へ来られ、真面目によく仕事をされて、同43年3月に研究論文「乳児における百日咳、ジフテリア、破傷風3種混合ワクチンとウイルスワクチン（ポリオ生ワクチン又は麻疹不活化ワクチン）の併用が百日咳、ジフテリア並びに破傷風の免疫効果に及ぼす影響に就いて」で学位取得。なお、同42年大学院終了後から慶福育児会麻布乳児院へ出向一。以上が「慶應時代」で、以後「北里時代」が33年の長きに亘ります。

その「北里時代」の幕開けは、昭和43年11月18日の北里大学医学部設置許可申請書に初代小児科教授予定者として名を連ねた故坂上正道先生が、三浦先生が真面目で勤勉な人柄を認め、同45年3月1日付で設置現場への先発隊の助教授として送り込まれたこと。そして先生は任を受けて荒蕪たる相模原の仮設校舎・工事現場へ赴き、認可に必要な書類・教育カリキュラムの作成、機械・機器・物品の購入など、砂塵に埋もれながら開学・開院の準備を着々進められ、見事、同年5月18日に相模原校舎で第1回入学式、また翌46年7月26日には病院開院へと漕ぎ着けられたこと…。

やがて開院後の診療現場では、当時需要の多かった小児神経、就中「小児てんかん」の専門外来を開設して多数の患児を集められ、而もそれを先生の涙ぐましいほどの勤勉さを以って良好処理されつつ、何時の間にか「小児てんかん」の大家になっていられました。

因みに、先生の同疾患の管理処理は原理的に、抗けいれん薬投与量を患児の症状/血中濃度に基づいて決める手法だったようで、これは曾ってジフテリア研究班当時の血中抗体価測定値に依る方法にヒントを得たものでは…？ 的中？

同62年1月に教授に昇進。在任中、平成10年10月第32回てんかん学会主催、翌11年6月第16回日本TDM学会主催（いずれもパシフィコ横浜）。同15年3月北里大学定年退職、同4月同名誉教授。退職後も、大学近隣の重症心身障碍児施設相模原療育園の施設長に就任など、ご経歴にふさわしいコースを進まれました。



なお、北里大学小児科同窓会会長も兼ねておられましたが、4～5年前から会長欠席をされ、これは不祥事と善処をお願いしていましたが、噂では受けられた頸椎手術が旨く行かなかった…など、聞くものの音信不通。漸く最近になり、後任の会長として北里・医学部卒1回生の小口弘毅先生を推薦され、正に適切と安堵していたところでしたが…。

多年に亘るご交誼を頂き、誠に有難うございました。心よりご冥福をお祈り致します。

恩師三浦先生への感謝

札幌緑花会 緑ヶ丘療育園 皆川 公夫

私が入局した当時新設医大だった北里小児科では専門性を持った優秀で個性的な先生方がオーベンとして指導して下さいましたが、私の最初のオーベンだった三浦先生はとても真面目で、いつもひょうひょうとされておられました。私はその後も三浦先生に師事し、結局は三浦先生の一番弟子として小児神経・てんかんを専攻することになりました。当時先生は抗てんかん薬の薬物動態の研究では日本のリーダーシップをとり、抗てんかん薬の血中濃度といえは北里といわれていました。とくにジアゼパムの薬物動態の解析から提唱したダイアップ坐剤の投与法は2015年の熱性けいれん診療ガイドラインにも取り入れられています。

三浦先生には国内の学会のみならず国際学会にもご一緒させていただきましたが、先生は自分の発表に関しても発表直前まで原稿に目を通すなど大変真面目で、私とは正反対でした。ただ、いつも早口の発表でしたので、大先生なのだからもっとゆっくり話されるとよいのにと感じていました。

先生はいつも私の論文原稿を「てにをは」の細かいところまで詳細にチェックしてくださいましたが、今は私が後輩の論文チェックの際に同じことをしています。

先生は外来診察日の前日までにカルテに予め脳波所見を記載するなど診察準備を完璧にされておりました。神経外来の患者数は大変多かったのですが、当日効率よく診察するための準備なのですが、私が北海道に戻った後には泊まり込むようにまでなられたと聞き、お体のことを心配しておりました。

三浦先生には北里で13年間ご指導いただきましたが、北里を離れた後もいつも目にかけてくださいました。しばらくは学会で先生のお元気な様子を確認できておりましたが、その後頸椎の状態が思わしくなく手術をされたと聞きました。長い間お目にかかることができず、心配していたのですが、一昨年6月に北里小児科同窓会総会に参加した折に青梅に入院されていた三浦先生をお見舞いいたしました。本当に久しぶりにお会いしたのですが、車椅子ながらいつものように早口でたくさんお話して下さい、とてもお元気な様子で、ほっとしておりました。

しかし、このたび突然の訃報に接することになり、愕然といたしました。今の自分があるのはすべて恩師の三浦先生のおかげです。心から感謝しています。そして先生の教えは我々小児神経グループにしっかり受け継がれています。三浦先生、どうぞ安らかにお休みください。

三浦寿男先生を偲んで

北里大学小児科 石井正浩

私が三浦寿男先生に初めてお会いしたのは、北里大学に2004年7月に赴任してすぐの暑い日でした。神経外来の日で、小児科のカンファレンスルームでお会いしました。赴任の挨拶をさせて頂きました。その時、三浦寿男先生は、私は現役の教授の時は毎日教授室に泊まっておりました。そして、すべて

の小児神経の患児の脳波を初め全資料に目を通し、患児のすべてを把握していました。と言われました。私は、三浦寿男先生の臨床にかける情熱に胸を打たれましたが、自分には到底まねが出来ないと思いました。その後は、北里大学小児科同窓会会長として小児科学教室を支えてくださいました。北里大学小児科同窓会論文賞の審査をご一緒させて頂いたのも私にとって大切な思い出です。先生は、沢山の弟子さんをお育てになりました。今は、三浦寿男先生が御指導された岩崎俊之准教授を中心に小児神経グループはグローバルな活動をして教室を引っ張って行ってくれています。先生の教えは北里大学小児科にしっかりと生き続けています。

三浦先生との思い出

相模台病院 白井宏幸(5回生)

そもそも、私が小児神経の道に入ったのは、日赤医療センターで2年の初期研修を終えた後、長津田総合病院に出向して、皆川公夫先生が上司になったことから始まります。当時出向病院の上司の専門分野に入るのが既定路線のようでした。私も卒後4年目に、皆川・三浦・水野諭先生に小児神経グループに誘っていただき、現在に至っております。特に三浦先生には、多大なご指導をいただき、各国の国際学会で出席・発表いたしました。ドイツ・フランス・ノルウェー・インド・インドネシア・オーストラリア・ハワイ・サンフランシスコ・ブラジル・アルゼンチンなどですが、初めての国際学会であったドイツ、ハンブルグでは日中の学会行事のみでなく、夜のハンブルグ観光に連れて行っていただきました。冬期五輪前のノルウェー、五輪前のオーストラリア、アルゼンチンでのイグアスの滝ヘリコプターツアー、ハワイでのカウアイ島探検ツアー、ブラジルのコパカバーナ海岸ではスリに会いそうになったり…、思い出は尽きません。ご冥福をお祈り申し上げます。

三浦寿男先生を偲んで

すなおしこどもクリニック 砂押 渉(7回生)

三浦先生の研究領域はてんかん患者の血中濃度を重視した治療管理と熱性けいれんの治療管理が中心でした。どちらの研究も正に実学で、主要な研究の場は専門外来でした。

熱性けいれんの再発予防はフェノバルビタール、バルプロ酸ナトリウムの継続投与からジアゼパムの発熱時間欠投与に移り、ジアゼパムのシロップ、注腸液、院内製剤の坐剤、ダイアップ坐剤を段階ごとに血中濃度の検討を実施して、再発防止法を確立されました。ジアゼパムについては、条件に合致する患児の保護者に説明し同意を得て、血中濃度を継時的に測定して、活性代謝物を含む臨床薬理的各種パラメータを算出、このデータを基礎に追加投与の時間を初回投与から8時間後に設定して臨床効果の評価検討に進みました。また、再発防止がてんかんへの移行の防止ではないことを示され、これらの実績をもとに、後に「熱性けいれん治療管理ガイドライン」を中心となってまとめられました。

てんかんの治療管理についても先駆的役割を果たされました。抗てんかん薬の臨床効果・副作用と血中濃度との関係、抗てんかん薬の併用を行った場合の相互作用について、様々な薬剤の単剤投与、併用投与について分析し、臨床上の投与基準を打ち立てられました。

例えばカルバマゼピン（テグレトール）の初期投与量は年長児を除くと10mg/Kgで2週間継続するうちに肝酵素誘導のため薬物代謝が増加するので、2週間後に標準投与量15mg/Kgに増量する。薬疹が生ずる場合、殆どが10日～28日に出現するので予め伝えておく。標準投与量に増量後4週目に血中

濃度を測定する。標準投与量に増量後なお、発作が抑制されず血中濃度が 7 $\mu\text{g}/\text{dl}$ 以下の場合は増量により発作が抑制されることが期待できる。また、バルプロ酸ナトリウムと併用すると眠気、ふらつきを惹起しやすい活性代謝物の割合が増加する。反対に多くの抗てんかん薬はカルバマゼピンの併用により血中濃度が低下する。今では当然のことですが、これらの事項を自らのデータで検証し、臨床に役立てて来られました。

専門外来は水曜日の午前・午後、土曜日の午前（後に金曜日に変更）でした。専門外来前日には外来準備がありました。全ての予約カルテに三浦先生が目を通され、翌日の診療の指示を出されました。カルテに処方箋のゴム印を押し、外来日当日の更に 4 (8) 週後の来院予定日の診療予定（採血、結果の説明、薬再診など）を示されました。指示内容に合わせて、受診当日に患者さんに渡す処方箋、採血予定であれば採血伝票、脳波予約であれば脳波予約依頼伝票、再診日とその日に予定する診療予定を記載した予約票を処方ケースにセットします。また、結果を説明する準備では、採血結果の確認、カルテにご自身の脳波判読結果を記載されました。この脳波判読のため、三浦先生は予め毎晩遅く脳波室を合鍵で開け、その日に検査された小児科の依頼した全ての脳波原図と取り組み、ご自身のノートに所見を書き記されておられました。

外来日当日、私たち神経グループの担当医は、患者さんに記入頂いた経過のメモで前回受診から順調に過ごされたかどうかを確認して患者さんに面談します。順調でない場合には三浦先生に指示を仰ぎます。患者数が増大するにつれ、次第に担当医の判断を次回再診日のカルテチェックで確認する形になりました。患者数は病院内でも有数で、小児科の精神神経外来と呼吸器外来、島田先生の産科外来が重なる水曜日は駐車場難の状態でした。

坂上正道院長のもとオーダーシステムのコンピューター化が行われ、一般的な外来とはやり方が異なる専門外来を、K T I S (Kitasato total information system) 担当者と協議を重ねつつ、特別に三浦外来システムを構築して対応しました。

これらの臨床、研究、教育活動に加え、病院長室長を含む様々な管理業務、多忙な日々を過ごす中で、三浦先生は週末を除いては教授室に泊まっておられました。これが後年頸椎症の悪化に繋がったものと思われ大変残念です。

学外でも学会の理事、各種新規抗てんかん薬の臨床開発の代表世話人として活動されたほか、更には学会の年次会頭として日本てんかん学会、日本TDM学会などを主催されました。

ここまでお読みになった印象では、三浦先生は全てご自身で確認しないと気が済まない御仁と思われるかも知れません。確かに、抄録、論文では一字一句に目を光らせ、納得のいくまで手直しを指示されましたが、私が学会の事務局を務めた経験からは、任せるところは人に委ねる別の一面もありました。

ルーチンワークの些細な事柄を書き連ねましたが、皆様方に在りし日の三浦先生のお姿の一端をお伝えし、当時を思い起こしていただけたらと考えました。

三浦先生を偲んで

相模原療育園 施設長 細田のぞみ

三浦先生の訃報に驚き、今だに虚脱感を感じております。先生との初めての出会いは6年生の時です。卒業試験の最中に、北里大学病院に勤務したいとご挨拶に伺った際に出迎えてくださったのが三浦先生でした。その後、医師になり、小児神経の道に進みましたが、小児てんかん学の権威である三浦先

生にご指導いただけたことは本当に光栄でした。大学病院時代の三浦先生は本当にご多忙で、書き上げた論文を読んでいただけるのはいつも夜中。当時まだ幼かった娘をおぶって三浦先生の厳しい論文指導をうけていたあの頃が本当になつかしく思い出されます。

先生は大学を定年退職後、平成15年4月から相模原療育園の施設長になられ、私も同時に相模原療育園にまいりました。三浦先生は相模原療育園で外来診療を開始され、地域に開かれた施設になる土台を築いてくださいました。平成23年3月に退職され、療養に入られてから2回お会いしましたが、まず療育園のことを案じてくださって、本当にありがたい思いがしました。天国の先生にご心配をおかけしないように、相模原療育園を相模原市の重症心身障害児者とその家族のよりどころになるような施設に発展させるべく、力を尽くしたいと思っております。三浦先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

三浦寿男先生を偲んで

武井小児科医院 武井 研二

三浦先生との出会いは、私の医学部5年ごろからで、障害児対象のプール教室のお手伝いをしたときから、ご指導をうけてきました。その後、小児科の講義・実習、小児科医局入局後の研修医時代、そして神経グループのボスとして、先生が退職後（33年 北里大学病院勤務）も、相模原療育園で6年間、お世話になり続けてきました。開業後も、なにかと気をつけてくださり、父（兄？）以上の先輩として、多くを学ばせていただき、常に、見守ってきていただきました。わたしが、小児科医として継続でき、医師会、地域支援事業に現在従事できているのは、先生のおかげとって過言ではありません。先生は、てんかん患児（者）の診療とその薬物療法に関わる抗てんかん薬の体内動態、治療方法、熱性けいれんの予防の研究を主要テーマに、長年、多くの患児（者）を対象に臨床研究を続けたうえ、大学病院の倫理関連面を支えてきました。そのうえ、後年は、重症心身障害児（者）の方ならびに、その家族に、よりそってきました。国内の学会はもちろん、国外の学会にも多くみずから参加し、わたしたちをご指導（いつも、原稿は、真っ赤になるまで何度もなおしていただきました）（実際に、わたしも、ふくめ、臨床を継続させながら、多くの先生を医学博士・専門医にしてきました）してくださいました。これからも、先生の穏やさ、冷静さ、慎重さ、まじめさ、気さくさを忘れずに、中医をめざしていきたいと思えます（先生が好きな中国の古い諺に、「小医は病を癒し、中医は人を癒す。大医は国を癒す。」があります）。

三浦寿男先生を偲んで

北里大学小児科 岩崎 俊之（17回生）

三浦先生は、とても厳しい師でした。そして優しい方でした。最後の弟子であり、最も不肖な教え子である私が、先生との思い出を語るのも不相応に感じます。ようやく探し出した先生のお写真を拝見すると、今でも厳しい視線で叱られているような気がしてしまいます。素晴らしい追悼文は、他の先生方にお任せして、私は先生が活躍されていた頃の写真を読者の皆様にお示しします。先生をご存知の皆様には懐かしく思い出して頂いて、若い先生方には三浦寿男名誉教授をご紹介したいと思えます。

[写真1] 2002年から4年間行われた厚生労働科学研究費による研究事業の際の写真です（前列右から4番目）。本研究は、東京女子医科大学の大澤真木子名誉教授を中心に行われました。この研究の成果として、現在では、てんかん重積の患児にミダゾラムを安全に投与できるようになりました。三浦先生は、その薬物血中動態の分野で協力されました。ややピンボケなのが残念です。



写真1

[写真2] 1999年6月18日～19日に横浜で開催された第16回日本TDM学会の大会長を務められた際の写真です。蝶ネクタイがトレードマークだった初代小児科学教授の坂上正道先生との貴重な一コマです。



写真2



写真3

[写真3] 1998年10月9日～10日に横浜で開催された第32回日本てんかん学会の大会長を務められた際の写真です。どうもこの角度のお写真がお気に入りだったようです。

[写真4、5、6] 同年の9月にスロベニアのルピアナという都市で開催された8th International Child Neurology Congressで発表した時の写真です。お酒を殆

ど召し上がらない先生は、海外では、水替わりにコココーラを飲んでいらっしゃるの印象的でした。市内観光で、古城や洞窟を訪れた際には、ポンチョをかぶられた先生の貴重な写真を撮ることが出来ました。

小児神経学ならびにてんかん学の分野では、“薬物血中濃度の北里”として、先生から受け継がせて頂いた研究が現在も名を馳せています。ご自身を顧みないほどの、臨床と研究に対する情熱をお手本にして、私達も歩いて行きます。どうか安らかに、永眠されますことをお祈り申し上げます。



写真4



写真5



写真6

追悼 朝倉昭雄先生

故 朝倉昭雄先生を偲んで

山岸 稔

朝倉先生（3回生）が平成28年8月15日ご逝去との報せに、“何たる無念！ 続けざまとは！”と慨嘆せざるを得ません。僅か5ヶ月前の3月16日に同級生の野崎秀世先生が死去され、追悼文を本会報 Vol. 20(平 28.6 刊)に寄稿した際に、小生が書くよりは同級の朝倉先生の方が適任だが、病臥中で…と、弁明・代筆したばかりでしたから。

顧みれば野崎先生と同じく、昭和53年3月に北里・医学部卒業、同4月小児科へお入りになり、3年後の56年4月からは新設3年目の産業医科大学へ出張、以後63年3月まで7年間に亘り、大学病院小児科創設と地域医療に参加して下さいました。

そこで早速、元秘書の椎木みどりさんに、当時の記録と写真を送って貰い検証しました。その結果、この7年間の九州生活(留学2年間を含め)で、先生は2つの見事な足跡を遺されていたことが明白となりました。その1つは血友病患者の包括的治療、そしてもう1つは聡明な九州娘を娶られたことです。

先ず最初の1つから、産業医大へ来られた先生は日常の診療業務の他に、白幡聡助教授(当時)らが設立した北部九州血友病センターに参加され、恰も患者の自己注射が認可されたのを機に家庭治療の普及に努められ、昭和58年6月6日その道の先輩格アメリカ・カリフォルニア大学小児科 C, F, Abildgaard 教授ら一行を招聘した「血友病家庭治療懇話会」では、積極的に交歓かつ知遇を得て同教授の元へ2年間留学(58年秋～60年9月中旬)。しかも帰国時の手土産が英文論文で、和訳すれば「外見上劣性遺伝形式を示した von Willebrand 病 II A 型」…。小生も大いに勉強させられました！

さて次の1つが、先生の「九州嫁娶り物語」で、当初57年2月に小児病棟で新人ピカーだったナースの浦野曜子さん(当時26歳)と初めての出会いを持つや、その機会を活かし、もともと朗らかな性格からバレンタイン・デーのチョコレートの多さなど…、噂話を流したり。むろん2年間の留学期間も空白にせず、帰国してゴールイン、挙式。翌61年1月18日ザ・ホテル横浜にて披露宴。その時の先生の説明で自称「母親想い」の自分には母が気に入る嫁が先決で、今回それが叶って…。この挨拶がまだ耳に残っています。

昭和63年4月横浜で小児科を開業しておられたお母様の元へ戻られ、お母様がお亡くなりになられた後、最近はお母様の協力を得て横須賀・津久井・愛加那クリニックビルで「あさくらこどもクリニック」を開業しておられたご様子でしたがー。

長年のご交誼と過年のご協力に深く感謝し、ご冥福を心からお祈り申し上げます。



朝倉先生を偲んで

佐藤 雄二(1回生)

我々が入学した頃はミニスカート、ツイギイ、グループサウンズ全盛の時代であった。横浜出身の朝倉先生は、流行りの服装でグループサウンズのボーカルを担当し、英語の歌を歌っているのを聞いた記憶がある。英語の発音も良く、会津出身の私にとっては、すべてが驚きの光景であった。学生時代は、40キロの体重であったのは、医者になってからの姿からは想像できないことであろう。

九州、産業医大に来てからは、白幡教授のもと、凝固系の勉強を一生懸命やっていた。野崎先生とは仲が良く、いつも一緒にいた。学生時代も、産業医大に来たのも一緒であった。なにも、亡くなる時まで、同じ年にするともないだろうに…。天国でも昔のように二人で、仲良くやっているのだろうか。合掌。



関連病院の近況から

JCHO 相模野病院 今井純好(8回生)

私が現在仕事をする相模野病院(以下相模野と略)は、皆様も御存じの通り JR 横浜線矢部駅から徒歩2分、交通の便の極めて良い病院です。2014年に社会保険から独立行政法人地域医療推進機構(JCHO:ジェイコーと皆呼んでいます)に所属が移行されました。現在の小児科医師スタッフは常勤医として小阪裕佳子先生、横関祐一郎先生、藤武義人先生、そして私の4名、非常勤医として風張真由美先生・村松秀樹先生(週1回)安藤寿先生(月1回)、また当直を何人かの同窓会の先生にお手伝い頂き、新生児においては365日24時間体制で診療を行っています。NICU9床、GCU12床(2017年度)、神奈川県周産期救急システムの県央・北相地域の中核病院(基幹病院:北里大学病院)であり、地域の周産期医療新生児医療の一環として役割をはたしています。また2012年に新病院がオープンし病棟も新しく拡張され入院数も右肩上がり、現在NICU・GCU併せて年間270人余り(25%は院外出生)の新生児を受け入れています。



す。しかし一般小児科病床は外科系の混合病棟に属し、病棟の状況からも重症患児の受け入れは難しく、思うような入院治療が行えていない現状です。

私は 1988 年から 2 年、そして 1999 年から今まで相模野にお世話になっているわけですが、北里大学小児科と相模野の関係は 1980 年からで、未熟児センター(当時の名称)の本格的な開設準備のため齊藤幸一先生が赴任され、その後仁志田博司先生をはじめ多くの小児科同窓会の先生方の尽力により未熟児センターが確立されました。1986 年の病院 25 周年記念誌に伊藤(旧姓丸野)民恵先生は「未熟児センターの機能維持と一般小児科の今後を考えると、2 人の常勤医では少々荷が重いと感じている。」と書かれており、当時のご苦勞が伺えます。その後小児科医も 3 名 4 名と増加しましたが、40 周年記念誌で(当時の小児科・新生児科は病院長河西紀昭先生、山田俊彦先生、荻野純代先生、そして私)私は、「NICU は充実した診療が行えていると思うが、一般小児科に関しては満足できるものではない。成長していく子供のすべての場面で診療に携わるのが小児科医であるから、NICU を巢立っていった子供のあらゆる場面で起こり得る事柄に十分対応できるようにしていきたい。」と書いていました。しかし残念ながらその思いは完成しておらず、それどころか NICU・GCU の拡大により一般小児科入院診療は縮小せざるを得ませんでした。そして今入院診療が十分できない分、外来診療で継続的にかかわりを持つことに力を入れているつもりです。また私は 1 回目の赴任も含め、相模野で 30 名あまりの北里小児科同窓会の先生方と仕事をさせて頂きました。すべての先生方が本当に熱心に仕事をしてくださり、時々メンバーで助け合うことでここまでこられたのだと思います。中には相模野から新しい世界に旅立つ方もいて、何人かの先生の門出を見送りました。確かにその時は少し寂しい気持ちにもなりましたが、今はどの先生方も成功しておられ本当にうれしく思います。最後になりましたが、今の相模野病院小児科・新生児科があるのは、私より以前に相模野で尽力された諸先輩先生方、私と共に仕事をしてくださった 30 人余りの先生方、そして共に仕事をするのではなくても子供たちのために力を貸して下さった代々の小児科教授をはじめとする北里大学病院小児科の先生方、多くの小児科同窓会の先生方のお陰であると感謝しております。本当にありがとうございました、そしてこれからもどうぞよろしくお願い致します。

日本甲状腺学会特別功勞賞受賞-松浦信夫先生

日本甲状腺学会特別功勞賞を受賞して

北里大学医学部小児科前教授 松浦信夫

平成 29 年 10 月 7 日(土)、別府市で開催された第 60 回日本甲状腺学会総会で、赤水尚史理事長から、特別功勞賞を受賞いたしました。26 年ぶり 3 人目の受賞で、小児科医では初めてでした。受賞の理由は、簡単に述べられましたが、以下のようなことでした。

私が北大医学部を卒業し、インターン、初期臨床研修を終えた頃の北大小児科は、活気にあふれていました。夕方5時頃までは、診療に当たり、これが終わると各グループごとに研究が開始されていました。皆の合い言葉は、「教科書の1ページ、1行を書き換えるような仕事をしたい」でありました。

当初の研究テーマは代謝学、特に糖尿病で、後の熊本大学教授の松田一郎先生の指導を受けていました。カナダ留学から帰国後、内分泌担当の奥野晃正講師が旭川医大に転出したため、山田尚達教授から内分泌疾患をも担当する様に言われました。その頃、新生児マススクリーニング

が開始され多くの症例を経験する機会に恵まれました。

ある時、函館中央病院小児科の綿谷先生（故人）から、新生児症例について相談の電話がかかってきました。明らかな先天性甲状腺機能低下症児ですが、母親が橋本病であること、患児が著明な pitting edema を示していることが、何か頭に残りました。多くの先天性甲状腺機能低下症の症例を見てきましたが、pitting edema を示した症例はありません。後日、この症例が、一過性甲状腺機能低下症であることが判明しました。症例の弟も同じ病態で、出生24時間後から著明な pitting edema を認めました。

幸運であったことは、このとき Wales 大学の B. Rees Smith らが TSH-receptor assay 法を確立し、TSH 受容体刺激抗体を発見したこと、京都大学核医学教室の小西淳二教授らのグループが、橋本病患者に TSH 受容体阻害抗体が存在することを明らかにしたことでした。

この兄弟例は「TSH 受容体阻害抗体による一過性、家族性甲状腺機能低下症」のタイトルで N Engl J Med に掲載されました。この他、「バセドウ母体から出生する新生児甲状腺機能異常」が Lancet に掲載され、「小児慢性甲状腺炎の病態-TSH 受容体抗体との関係-」の論文が、最も長くネルソンの教科書に引用されていました。

甲状腺学については、基礎的研究ではなく、全て臨床研究で多くの成果を上げることができ、今回の受賞につながったものと思われます。周産期は、内科の先生が取り扱うことのできにくい分野で有り、また新生児マススクリーニングが開始され多く症例を経験できたこと、TSH 受容体抗体が測定され、病態解析に新しい方法が見つかった時期に、臨床研究ができる機会が得られた幸運が、今回の受賞につながったものと考えています。

松浦信夫先生が日本甲状腺学会特別功労賞を受賞

聖徳大学児童学部児童学科（相模台病院小児科）原田正平

同窓会会報 Vol. 20（平成28年6月）で横田行史先生がご報告された日本糖尿病学会の坂口賞受賞に



学会理事長の赤水尚史先生(右)より賞を授与される松浦信夫先生(左)

続いて、本年（平成 29 年）北里大学医学部小児科前教授・松浦信夫先生が、日本甲状腺学会より栄誉ある賞を授与されましたので、そのご紹介と共にお祝いの言葉を伝えさせていただきます。



受賞式にてスピーチされる松浦先生

ったものと考えられます。入江先生は、いまでは世界各国で行われている先天性甲状腺機能低下症の新生児マスキングが、世界で初めて国家的事業として日本に導入される際の厚生省（当時）研究班の代表をされるなど、世界的にも高名な甲状腺学者であり、鳥塚先生に次いで二人目の特別功労賞は当然と考えられたものと思われま

す。お二人が受賞されたのは、現在の日本甲状腺学会が日本内分泌学会甲状腺分科会だった時代のことであり、平成 7 年に日本甲状腺学会となって以来、特別功労賞の受賞はとぎれていました。

平成 27 年の日本甲状腺学会で、特別功労賞の規定を明確にすべきとの意見がだされ、「甲状腺学の領域において優れた功績をあげた会員、ならびに国内外の卓越した研究者に対して、日本甲状腺学会学術集会時において、特別功労賞を授与できるものとする。詳細は、理事会において協議するものとする。」という規定となりました。平成 28 年は受賞者がありませんでしたが、本年、特別功労賞にふさわしい業績のある学会員として、新規定での第 1 回目の受賞者に松浦先生が選ばれたと伺っております。

松浦先生の受賞理由は、阻害型 TSH 受容体抗体による新生児一過性甲状腺機能低下症を世界で初めて報告（N Engl J Med 303:738-41, 1980）されたうえに、その病態解明や予後の全国調査をされ、胎児期の母児の甲状腺機能低下症が児の予後不良を招くことを明らかにするなど、甲状腺学の標準教科書である The Thyroid やネルソンの小児科学教科書に新しい 1 行を付け加えられたことにあると考えられます。松浦先生は後輩の私たちに常々「教科書の 1 行を書き換えよう」と言われています（小児科診療 68:744-45, 2005）

が、自ら範を垂れた業績が日本甲状腺学会で顕彰されたことは、北里大学小児科の名誉と言うべき事と考えられ、改めて皆様と一緒に祝いさせていただきたいと思



特別功労賞の盾をもたれた松浦先生（左）と赤水尚史学会理事長（右）

開業報告

開業して

小児科・内科 緒方医院 緒方 昌平

平成 13 年入局の緒方です。この度、平成 28 年度付で北里大学病院小児科を退職し、4 月より相武台で父の開業するクリニックで診療を行っております。

元々、父の診療所を継ぐ意志の元、卒後研修の場として北里を選択しました。当初、入局 5 年程度で小児科専門医を取得し開業する予定でしたが、北里に入局し、諸先輩方のご指導の元、様々な患者様を診療する経験を積ませてもらう中で小児炎症に興味を持ち、約 16 年間の月日を北里で過ごして参りました。小児炎症・免疫疾患、並びに重症児の診療に関わりたいという思いもありましたが、父の年齢や、諸経験を積ませていただいた中で、一人の医者として自立した医療を展開したい思いから開業することにしました。

当クリニックは父が開業して以来、約 35 年が経過しました。クリニックに身を置いてまだ 5 ヶ月程度ですが、父の築いた地盤が非常に大きく、地域医療として地に根付いた診療所であることを痛切に感じている次第です。北里で経験した症例のほとんどが、専門性、重症度が高い疾患であり、一回の診療、患者との関わりが濃密でした。対称的に、今では短い診察で気軽な受診ではありますが、長い年月の中で関わりを深めていく医療に変わりました。このような診療体系は、自分にとって新しい経験となっており、あらためて現代のプライマリーケアドクターとしてのスタンス、ニーズを体感し、自分のできる医療貢献・提供はなんなのかを日々考え模索しています。近代医療は細分化され専門性に特化してきました。一方で、今後の医療情勢を見据える中で、開業 35 年という年月で父が築き上げた地域と密着した信頼関係を生かす診療体系を大切に、本クリニック独自のプライマリーケアの位置付けを確立させていきたいと考えています。

北里大学小児科での 16 年間の経験により、医師として適切な医療を提供できる自信が 診察室
持てるまでに成長させてもらいました。これまでご指導いただいた諸先輩方に感謝すると共に、北里大学病院のお膝元での開業ですので、病診・診々連携を大切に、自分のできる医療貢献に邁進していきたいと存じます。何卒今後とも宜しくお願い申し上げます。



クリニック入口



新入会員



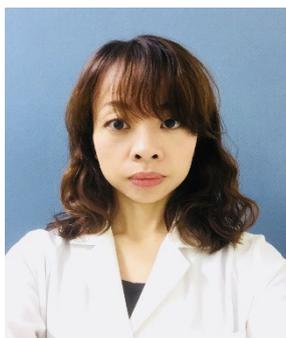
聖徳大学児童学部児童学科 原田正平

この平成 29 年 7 月より、北里大学小児科同窓会に入会させて頂きました原田正平です。新入会員としては臺が立ちすぎているが（「とうがたつ」という言葉自体も死語のようですが）、縁あってこの 4 月から、関連施設の相模台病院（座間市）で、松浦信夫先生が長年担当されていた小児内分泌外来を引き継がせて頂く事となり、あわせて本同窓会にも入会をお許し頂きました。出身は北海道大学で、奇しくも相模台病院小児科の白井宏幸先生とは同期相当の昭和 55 年卒業です。北海道内で小児科学、小児内分泌学の研修、研究を行い、平成 16 年 8 月から平成 28 年 3 月まで国立成育医療研究センターで小児慢性特定疾患や新生児マススクリーニング関連の仕事に従事し、平成 28 年 4 月からは松浦先生の後任として聖徳大学（松戸市）で保育士や幼稚園教諭等の育成にあたっています。これまでの経験等を活かし相模台病院小児内分泌外来を継続してまいりますので、同窓の皆様には引き続きご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



医学部 講師(寄附講座兼任) 齋木宏文

平成 29 年 4 月より循環器地域医療研究講座(いわき)兼担で小児科学講座に赴任いたしました齋木宏文と申します。平成 13 年に北海道大学を卒業し、神奈川県立こども医療センター、聖隷浜松病院、兵庫県立こども病院で小児循環器病学を研修し、平成 18 年から兵庫県立こども病院循環器科でスタッフとして約 5 年間勤務した後、埼玉医科大学を経て平成 25 年から米国メイヨークリニックで放射線関連心筋障害・拡張機能障害の臨床研究および基礎研究に従事しました。北里大学病院で接する多種多様な重症疾患に対する管理は小児循環器病学にもっぱら従事して参りました自分にはとても新鮮で、ジェネラリストとしての小児科医のあり方を日々再認識させられています。個性的な医局員の先生方と臨床・研究に従事できる日々を楽しんでまいりたいと思います。至らないことも多いかと存じますが、何卒御指導賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。



医学部 特任助教(寄附講座兼任)桑田聖子

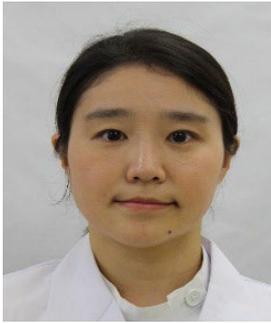
平成 29 年 4 月より北里大学小児科に福島県いわき市の寄附講座を開設していただき、小児科、小児循環器地域医療研究講座に所属することになりました桑田聖子と申します。

愛媛県出身で愛媛大学医学部を卒業後、横浜労災病院で初期研修および小児科後期研修を行い神奈川県に勤務するのは今回で 2 回目になります。後期研修後は埼玉医科大学総合医療センターで新生児科研修を行いました。新生児科研

修の中で循環器疾患に興味を持ち、平成 26 年より 3 年間は榊原記念病院で小児循環器科研修を行いました。

大学ではこれまでの研修で学んだ知識や経験を生かして小児循環器科医として成長するように臨床だけでなく研究なども頑張りたいと思っております。

また、いわき市での勤務を通して地域医療にも貢献していきたいと思っております。今後ともよろしくお願いたします。



医学部 助教 匹田さやか

2017 年 5 月より小児在宅支援センターに在籍させていただいております匹田さやかと申します。2008 年に自治医科大学を卒業し、今年の 3 月で自治医大の義務年限を終えました。いわゆる総合診療医として働いてまいりましたが、田舎の基幹病院の全科当直、離島や一人診療所での経験を経て、小児科の先生方がどのように地域の子どもたちを守っているのか改めて勉強したく、小児科の門を叩くことを決意しました。妊娠・出産を経て、小児科の先生方の偉大さに気付かされ、小児科医として地域の家族を見守ることで、健全な社会を育むことに携わることができるのではないかと感じた事も、後押しになりました。在宅・障害支援という慣れ親しんだフィールドから、小児科の先生方にご指導いただき、充実した日々を送っております。今後とも、変わらぬご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

***新世紀医療開発センター教授、先崎秀明先生も新入会員としてお迎えしております。**

2017(平成 29)年度医局長報告

医局長 野々田豊(26 回生)

2017 年 4 月より釧持前医局長から業務を引き継ぎました。これまでの自分は神経グループ内での診療ばかりで、全体的な視点で医局運営に関わることはありませんでした。人員不足で非常に厳しい状況下で、重大な任務を引き受けて果たして大丈夫だろうかという不安もありますが、何とか医局運営が維持できるよう全力を尽くす所存でいますので、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

不満の多い中、仕事を続けてくださっている医局員の方々に感謝いたします。また、同窓会の先生方から心配して声を掛けてくださることも多く大変ありがたく感じています。不慣れな点が多く、同窓会の皆様にも御迷惑をおかけしているのではないかと思います。よろしくお願いいたします。

<医局員構成>

大学の院内スタッフは石井教授、准教授 1 名、講師 4 名（うち特任講師 1 名）、診療講師 2 名、助教 9 名（うち特任助教 1 名）、後期研修医レジデント（病棟医）は 5 名でスタートしました。大学院には 1 名（江波戸孝輔先生）が在学しております。本年度より「北里大学寄附講座『小児—小児循環器地域医療学（いわき市）』」が開設され、新たに先崎秀明先生、齋木宏文先生、栗田聖子先生の小児循環器

3名の先生を迎えることとなりました。先生方には医局に新しい風を吹き込んでくれることを期待しています。また、先崎先生は、本年11月より、新世紀医療開発センター小児循環器集中治療学教授として、北里大学に赴任されています。院外人事に関しては、本年度も欠員補充のないまま非常に厳しい中での協力要請をお願いしています。皆様のご協力に感謝しております。留学は、Cincinnati Children's Hospital Medical Centerに本田崇先生が、東京都立小児病院集中治療科に峰尾恵梨先生が国内留学中です。

<新入職、および退職>

本年5月より東病院の小児在宅支援センターに匹田さやか先生が入職されました。匹田先生はもともと小児科医ではなく、津久井地区で地域医療を行ってきた総合診療医であり、熱い志しを持って小児在宅支援センターを自ら志願して入職されました。入職して数週間で小児科診療の特殊性を要領よく習得し、すでに小児医療の一員としてご活躍されています。これからの小児医療はこうした診療科を超えた連携も模索しなければならないと感じました。一方で、緒方昌平先生が開業のため退職されました。

<病棟、外来診療体制> 敬称略

周産母子成育医療センター センター長：石井正浩 総病棟主任：橋田一輝
診療主任：NICU 鈮持学、PICU 安藤寿、6E 橋田一輝 外来主任：高梨学
東病院 小児在宅支援センター センター長：岩崎俊之

<主治医制（グループ診療制）>

昨今の病棟の人員不足によりこれまでのチーフレジデント制の存続が困難となり、主治医制（グループ診療制）に変更となりました。一般病床に入院している患者さんにおいて、これまで病棟レジデントが行ってきた入院指示、処置、入院カルテ、日々の病状説明、退院時サマリー等の病棟業務を、外来主治医、または当該診療グループ医師が行うことになりました。外来と病棟を頻繁に往復する煩雑さはありますが、主治医が考えている意図が家族や病棟ナースにダイレクトに伝わる等、良い面があることも発見しました。特定のグループだけが忙しくならないよう、グループ同士でお互い協力し合うことも心掛けています。

<学会報告、論文発表、専門医>

留学中の本田崇先生の論文が、日本小児循環器学会の Young Investigator Award を受賞し表彰されました。その他、スタッフをはじめ病棟医の先生たちも各方面の学会や地方会等で積極的に発表しています。また、白井宏直先生、田村祐平先生の二人が小児科学会専門医に合格されました。

<医局長になって>

今の医局の状況を見たときに、北里大学小児科の良いところは何だろうと考えてみたところ、それは教育熱心なところではないかと思いました。教授以下、スタッフが病棟医を、病棟医は研修医を教育し、どの医師も下の人間を育てようとする意識が非常に高いと感じました。たとえば小児科専門医試験対策のクルズスをグループごとに用意し、また、今や専門医の申請に不可欠となった論文作成にも各病棟医に一人の担当がついてマンツーマン指導を行っています。その他にも、学会発表の指導などもさかんに行われています。一言で言えば面倒見の良い医局だと思います。人員不足の中忙しい状況下でもこれらの教育活動をおろそかにせず続けています。こういう「人を育てる」姿勢を継続できれば、今後入局者が増えてくるだろうと期待しています。今後とも、先生方のご支援をよろしくお願い申し上げます。

★平成29年度 北里大学小児科同窓会総会懇親会より★



写真1

総会、懇親会のリアリティーを高めるために、スポット写真とコメントを掲載しています。

撮影した写真をインタビュー記事（録音）はいくつもあります。今回は、3枚の写真を選ばせて頂きました。

(写真1) 懇親会での全体写真です（参加されていて写っていない方もいらっしゃるようですが?）。高校、大学の同窓会写真のように、下に名前を入れなくてもまだ大丈夫、わかると思います。



写真2

(写真2)小口会長が事前に依頼され、御承諾が得られた3人の先生に、総会において、“私の取り組み”と題した興味深く楽しいお話しをお聞きすることができました。皆様、お元気で地域医療にどんな風に取り組んでおられるかをお話しになり、それぞれの個性がでているなあと感じました。

そのほかに印象に残ったこととお知らせすると、守屋先生は、以前より、テレビの医療ドラマの監修を手がけてきたようですが、最近、NHKで渡辺謙主演のドラマの監修に携わったことをニコニコして(?)お話されていました。内藤先生は、研修医や若い先生には、大学、関連病院において、パラメヂカルの方から技術的なこと等を吸収しておく、あとで役に立つことも多いと力説されていました。伊藤先生は、インフルエンザの予防接種についてインタビューを受けた際、その効果について、違った受け取り方をされ放送されてしまったことを例にとり、マスコミへの対応の難しさをお話されました。



写真3

(写真3)この写真を選んだのは、特別な意味はなく、若々しく映りがよく、“元気でやっています”という先生方の代表であるとお考えください。

平成 29 年度北里大学小児科同窓会総会議事録

- 期日・場所：平成 29 年 6 月 17 日（土）16 時よりホテルセンチュリー相模大野 8 階
- 理事会・評議員会：16 時～出席者数：13 名、委任状 11 名（評議員会成立人数 9 名）
- 総会：17 時半～ 出席者数：30 名、委任状 123 名（総会成立人数 74 名）
- 同窓会優秀論文賞授与式：審査経過報告：石井正浩 賞状授与：小口弘毅
- 議題

【報告事項】

1.平成 28 年度事業報告

- ①名簿発行（平成 28 年 6 月 1 日発行）紙媒体にて配布。事務局にて内製
- ②会報発行（平成 28 年 6 月 1 日発行 Vol.20・平成 29 年 3 月 16 日 Vol.21）
- ③平成 28 年 6 月 25 日同窓会理事会・評議員会・総会開催

2.平成 28 年度会計報告 年会費納入者数 149 名

（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）

収入		支出	
前年度繰越金	4,240,740	平成28年度総会開催費用	453,944
会費(28年度)	570,000	名簿発行費用	2,892
会費(29年度)	225,000	会報発行費用	483,840
会費(30年度)	5,000	郵送通信費	93,709
会費(過年度)	95,000	郵便振替手数料	12,204
利息	30	慶弔費	64,800
同窓会参加費	390,000	雑費	77,561
		人件費	357,573
		次年度繰越金	3,979,247
収入合計	5,525,770	支出合計	5,525,770

平成 28 年度会計 財務担当理事 砂押 渉
 監 事 佐藤 雄二
 監 事 白井 宏幸

※佐藤監事の会計監査により問題ないことを砂押財務担当理事が報告した。

3.同窓会基金収支 平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

収入		支出	
前年度繰越金	6,074,340	優秀論文賞	84,343
寄付	30,000	カンファレンスルーム PC	113,356
		周産期医学2016年間購読料	46,990
		小児内科 2016 年間購読料	45,964
収入合計①	6,104,340	支出合計②	290,653
次年度繰越残高	① - ② =		5,813,687

4.新入会員：齋木宏文・栗田聖子（平成 29 年 4 月採用）・匹田さやか（平成 29 年 5 月採用）

【審議事項】

1.平成 29 年度事業報告

- ①平成 29 年度会員名簿の発行について（6 月 1 日発行）紙媒体にて配布。事務局にて内製
- ②会報 Vol.22 の発行について（12 月 1 日発行予定）

- ③平成 29 年度同窓会総会開催について 平成 29 年 6 月 17 日（土）開催。30 年度は 6 月 9 日（土）開催予定。
 ④今年度の理事会・評議員会について 今年度は理事会の回数を増やして開催する予定。

2.平成 29 年度予算案（平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）

収入		支出	
前年度繰越金	3,979,247	平成29年度総会開催費用	430,000
会費(過年度含む)	600,000	名簿発行費用	5,000
利息	30	会報発行費用	243,000
同窓会参加費	380,000	郵送通信費	85,000
		郵便振替手数料	8,500
		慶弔費	100,000
		雑費	50,000
		人件費	300,000
		次年度繰越金	3,737,777
収入合計	4,959,277	支出合計	4,959,277

※予算案について承認された

- 3.同窓会会則について：梅原会則担当理事より、会則の見直しが必要な時期に来ているので、変更について考慮して行くとの提案があった。
- 4.役員人事について：①平成 29 年 6 月任期満了となる会長・副会長・評議員について(敬称略)
 ※理事→山岸・大山・梅原・石井・三沢先生、評議員→眞銅・横田・箕浦・今井・望月・栗原・田久保・岩波・釧持先生の再任について承諾を得た。
 ②監査の佐藤雄二先生がご勇退、後任監事として、山田俊彦先生から会長を通じ内諾後、理事・評議員会にて承認。その後の本総会に於いても承認を得た。
- 5.新入会者について：松浦副会長・石井理事よりの推薦により、原田正平先生（昭和 55 年北大医学部卒・現聖徳大学児童学科及び相模台病院内分泌外来を担当）の特別会員としての入会に関して、理事・評議員会にて承認を経て、本総会にて承認された。

6.その他

- ①会費の未納者に対して 住所不明会員を含め、5 年以上の年会費未納会員に関しては、過去名簿・会報の発送をしておらず、年会費振込票の送付もしていなかったため、今年度は名簿を発送するとともに、会費納入をお願いする手紙を同封し、集金に努めることで承認された。
- ②同窓会基金の運用に関して 今年度より、小児科ホームページの年間メンテナンス契約料を基金にて支出するべく、理事・評議員会での承認を経て、本総会にても承認された。また、同窓会のホームページを作成し、小児科ホームページからリンクできるようにする為の費用も基金から支出する。これについては、同窓会基金から支出できるかどうか、事務局にて、大学医学部経理に確認後、運用的に問題がなければ、基金より支出することで承認された。（後日、問題ないことを確認済み）

★総会終了後のプログラム

- 優秀論文賞は大谷清孝先生が受賞
- 会員よりの近況報告…伊藤民恵先生・守屋俊介先生・内藤剛彦先生より
- 小口会長より

平成 30 年度北里大学
小児科同窓会総会
開催予定のお知らせ

平成 30 年 6 月 9 日（土）開催予定となりました。

理事・評議員会 16：00～17：30

総会 17：30～

懇親会 総会終了後

場 所： 小田急ホテルセンチュリー相模大野

近況報告 (年度初めの名簿記載事項確認の際に併せてお知らせいただいたものです。)

山岸稔…日本医師会より寿会員として銀盃をいただきました。昨年5月理事長に就任（2病院、2老人ホーム、4保育園）病院長は兼任のままです。

飯高喜久雄…ヨガ、ピラティス、太極拳を楽しみながら、透析クリニックでなんとか元気に働いております。

堀口泰典(5回生)…小児循環器診療にひきつづき頑張っています。

石川信子(8回生)…大学の卒業式に参加しました。遠くからですが、壇上の石館先生の御尊顔を拝見、お元気そうで何よりです。

鎌木宏(8回生)… 近隣の先生に支えてもらい元気に仕事をしています。

新谷尚久(13回生)… 開業して約12年が経過し勤務医時代を振り返ると懐かしく感じる次第です。小生自身は恙なく元気にやっております。2年前より富山大学小児科の臨床教授を拝命し、若い医学部の学生さんとお付き合いするようになりました。彼らとの接点から沢山のモチベーションを分けてもらっております。同窓会の皆様へ、今後とも宜しくお願い申し上げます。

編集後記

今号より、ネットプリントを用い、事務局による紙面作りにトライしております。予算が大幅に削減され、カラー写真を増やすことができました。今回については、画像、レイアウトのよしあしはご容赦ください。また、総会と懇親会にスポットをあて、表紙の写真のほか、いくつかの写真を選び、若干のコメントも加えました。皆様のご感想はいかがでしょうか。事務局にご意見をお寄せくだされば幸いです。“百聞は一見に如かず”です。小口会長のご提言を待つことなく、来年こそ、総会、懇親会に参加されてご自身の目でお確かめください。

三浦先生、朝倉先生への追悼文を掲載しています。北里小児科創生期から御活躍された先生の訃報のお知らせは、寂しさとやりきれなさを感じます。坂上先生、八代先生の訃報を掲載した同窓会会報と今号をあわせてご覧いただくと、北里小児科の創生期の様子がまざまざと浮かんできます。三浦先生、ご指導ありがとうございました。（合掌）

（平石聰）

北里大学小児科同窓会事務局

〒252-0375 神奈川県相模原市南区北里1-15-1
(北里大学病院小児科外来カンファレンスルーム内)
TEL: 042-778-8920 (直通) FAX: 042-778-9726
メールアドレス: kpdoso@med.kitasato-u.ac.jp